

ローマ日本文化会館

幅広い分野の日本文化を多角的な観点から企画

ローマ日本文化会館では、日本文化を多面的にバランスよく紹介することを心がけ、2007年度も、さまざまな事業を実施しました。

館内展示では、現代建築展、木版リトグラフ展、クレイワーク展等を開催し、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館出品作家の岡部昌生氏の展覧会も開催しました。映画では、成瀬巳喜男監督特集や、小津安二郎・吉田喜重・北野武監督らの作品上映を実施しました。また、コンサートでは、日本の伝統音楽から、ルネサンス音楽、和太鼓とドラムスのデュオにいたるまで、多彩なジャンルを取り上げました。

外部との協力事業も積極的に行い、オーストリア文化会

館との共催による現代音楽コンサートや、日本人ピアニストと国立アカデミー管弦楽団首席クラリネット奏者等とのコンサ



ヒダじんぼのコンサート(ヒダノ修一氏と神保彰氏のユニット)©Mario BOCCIA

にも開催しています。さらに、イタリア各地での日本への関心の高まりを受け、地方での事業実施・支援にも力を入れ、ボローニャでの狂言公演等を行いました。

日本語教育については、当館日本語講座において、社会人向けに夜間や土曜日のコースも引き続き開講し、幅広い日本語学習のニーズに応えるとともに、イタリア各地での日本語教育を支援するため、教授法セミナー等を実施しました。

ケルン日本文化会館

あらゆる手段で現代の日本を紹介 他機関との連携も積極的

現代日本文化の紹介を軸として、展覧会、音楽会、映画会、講演会のほかに日本語の普及にも力を入れています。ドイツと日本の若手アーティストを紹介する当館の「対話展」は既に長い歴史を持っていますが、2007年は「佐藤・Schellhorn」展と「鈴木・Schniotalla」展を開催しました。前者はベルリン日独センターにも巡回する等、対話展としては初めての国内巡回を行い好評を博しました。そのほか、若手建築家藤本壮介氏の講演会を開催、文化人招へい事業で日本に招へいされたNWF州立美術館キュレーター、ドリス・クリストフ氏による日本美術の先端を紹介する講演会を開催し、「日本の今」を紹介するように努めています。

このほか、作家辻仁成氏巡回講演会(ベルリン、ミュンヘン)、マンハイム大学で実施された「日本語通訳セミナー」への協力、デュッセルドルフ大学で実施した『日



本のディアスポラ』、荻原俊 辻仁成氏「太陽待ち」朗読会 ©上野潤宏教授による講演会『9.11後の日本社会』等、他機関との連携による知的交流事業にも力を入れています。このほか、ケルン市との協力事業にも積極的に参加しています。

舞台芸術の分野では『ヒダじんぼ』『上々颱風』といったポップスから『時間の音』等日本やドイツの現代音楽のコンサートまで、幅広く紹介しました。毎年注目される「北野武」「金井勝」監督特集上映等の映画会には数多くの映画ファンが集いました。



Close Up

館長
上田 浩二

はじめてドイツに留学した頃、ケルンに日本文化会館ができたことを知りました。それから数十年、その会館の責任者をお引き受けしています。実際に着任してみると、なによりも「過渡期」であることを強く意識させられます。

本部からの予算を使って会館内で催しを行うスタイルからの脱却、芸術分野だけでなくシンポジウム等の知的交流にいたる多様な事業の展開等、新たな可能性を探る毎日です。また、日本と同じくらい広いドイツ(さらにスイス)をカバーするため、限られた予算の中で今なにか可

能なのか問われています。ドイツ統一でベルリンに首都が移転した結果、ケルンは首都から遠く離れた唯一の文化会館となりました。旧東独地域では日本情報がまだまだ少ないので、遠隔地ケルンからどう対処していくかも大きな課題です。

さらに、ドイツのような先進国における文化事業とは何か、世代ごとに大きく異なる日本観を事業の中でどこまで考慮に入れるか、異文化交流の研究をしてきた私にとっては、考える材料がいくらかもあって刺激的です。「過渡期はやりがいがある」と信じて、日本に関心のあるドイツの方々、館員の皆さんとともに前向きに進んでいきたいと思っています。

パリ日本文化会館

開館十周年事業に大きな反響

2007年度の展覧会は開館十周年事業として前年度開幕した「棟方志功」展に始まり、日欧交流に重点を絞って本部主催展「アジアのキュビズム」展および3年掛かりの企画「黒田清輝から藤田嗣治まで～パリに学んだ洋画家たち～」展を開催し、大反響を呼びました。

舞台では現代若者を表象する劇団チェルフィッチュ『三月の5日間』上演、前衛ジャズ「渋谷知らズオーケストラ」、大駱駝艦舞踏公演、十周年を飾る金剛流宇高会能公演、江戸糸操り人形座『牡丹燈籠』、劇団燐光群『屋根裏』上演、米国で活躍する亀吉敏子ジャズコンサート、そして会館初の文楽本公演と、伝統と前衛を交互に事業展開しました。映画事業では、海外で最大規模の「鈴木清順特集」と、映

画史を掘り下げるシリーズ新企画第1弾「日活の歴史」を開催しました。

また講演会では、日本食ブームに呼応して料理人・小山裕久氏による日本料理デモンストレーションおよび講演を初め、食文化講習会を何度も実施したほか、日本語教育支援事業や日本研究・知的交流事業にも力を入れ、後者では十周年記念で「日本語教育政策のニューアプローチ」と題した国際シンポジウムを開催する等、日本のソフトパワーを巡って熱い議論が交わされる機会を設けました。



「黒田清輝から藤田嗣治まで～パリに学んだ洋画家たち～」展：黒田清輝「婦人像(厨房)」東京藝術大学所蔵



Close Up

館長
中川 正輝

「パリ日本文化会館設立の企画は賭けであった。というのも、当時多くの難関を克服せねばならなかったからである。しかし10年を経て、今やパリの町並みにすっかり溶け込んだこの館の成功は、パリの一般市民が最も良く知るところである」

これは開館十周年を記念して、シラク前フランス大統領から頂いたメッセージの冒頭要約です。日々さまざまな文化的催しが身近にあるこのパリにおいて、一外国の文化会館が注目を浴びるには多くの努力と知恵が要求さ

れます。パリ日本文化会館は単なる博物館でも劇場でもない、いわば日本の文化の多様性を示すことを念頭に置いて企画を練り、人々の目に触れさせたことが成功の要因であると言えます。その多様性も、従来の展示、舞台公演、映画上映、講演会、図書館の5つの柱に加え、日本語の教育支援事業が軌道に乗り、文化としての日本料理の啓蒙企画が新たに加わったのが2007年度の特徴です。もう一つ特記すべきは、官民合同プロジェクトとして誕生した当館ゆえに、十周年を契機に経済界からの理解が一層深まり、特定企画に対しCSRの観点よりご支援を頂くケースが増えてきたこと。事業予算が厳しくなる昨今、誠に嬉しい兆しです。

ブタペスト事務所

日本・ハンガリー協力フォーラム特別事業開始

2004年10月の日本、ハンガリー両首相の合意に基づき、日本とハンガリーの交流を拡大する目的で有識者会合『日本・ハンガリー協力フォーラム』が設置されましたが、ハンガリーにおける日本語教育の維持、発展のために、協力フォーラムのイニシアティブで2007年度から6年間の予定で特別事業がスタートしました。

この特別事業は、複数の日本の有力企業からの寄付金を元に、現地日本語教師雇用のための支援、教師研修、教材開発等の包括的な日本語教育支援を行うものです。初年度となる2007年度は、中等教育、成人講座等4機関に教師雇用支援を実施したほか、6回の教師研修会を実施、

日本語教材作成のアウトラインを決定しました。

このほか主な事務所の活動では、事務所スペースを使っでの文化講演会を年5回、市内映画館を借りての劇映画を19回、地方都市での写真パネル展等を6回行い、事務所の日本語講座においても8コースを運営し120名近い生徒が勉強をしました。

日本語教師向けの研修会



ロンドン事務所

映画祭等、多彩なプロジェクトを実施
企業対象の調査等の新しい試みも

2007年度は、巡回展「新世代アーティスト展」や平田オリザ脚本「東京ノート」のドラマリーディング、巡回日本映画祭「A Life More Ordinary」等、現代日本文化のさまざまな姿を紹介する事業を中心に数々のプロジェクトを実施したほか、日本映画連続講座「Japanese Cinema for Busy People」を通じて日本映画を俯瞰する機会を提供しました。

日本語教育分野では、前年度に開発・作成した中等教育修了試験対応リソース『カー-CHIKARA-』を教材にした日本語教師研修会をシリーズ化して開催する一方、上級学習者を対象に、映画や短編小説を通じて日本語を学ぶ

Talking Contemporary Japan 講座を開講し、日本語教師と学習者双方にバランスよく目配りした事業展開を心がけました。

また新たな取り組みとしては、在英の日本文化専門家の中東地域派遣や、事業開発戦略室とともに在英日系企業を対象としたCSR活動状況調査を実施しました。



映画祭チラシ：映画に見る“普通”の日本人!?



『東京ノート』ドラマリーディング

カイロ事務所

参加型の事業
きめ細やかなサポートで文化の架け橋に

日本の伝統文化である和紙・凧・書道・工芸等の展示会やワークショップ、レクチャーデモンストレーションを実施し、日本の生活文化を紹介する一方、主に若者層を対象にアニメーション映画上映、日本ドラマテレビ放映、電子音楽を融合させたトランペットコンサート等の現代の日本文化の紹介も実施しました。特に「凧ワークショップ」では、日本から専門家大橋栄二氏を迎え、凧作りワークショップのみならず、ギザの大ピラミッドにてエジプトと日本の子ども達の凧揚げ大会を実施し、ピラミッドの空に連凧が揚がり、文字通り両国の架け橋となりました。

日本語教育事業では、カイロ事務所が運営するカイロおよびアレキサンドリアでの一般向け日本語講座の人气が高く、初級を中心に上級コースまで年間のべ約600名の学習者を受け入れました。また、中東地域の教師を対象として実施した「中東日本語教育セミナー」には57名の日本語教師が参加し、中東の日本語教師ネットワークの維持、レベルアップのサポートにもなりました。



ピラミッドを背景に凧が舞う



Close Up

所長
福田 和弘

日本から遠く離れた当地において、日本についての情報は限られていますが、事務所のホームページや機関誌でのアラビア語での情報発信をはじめとして、インタラクティブな事業を通じてエジプトの人達が日本文化を体験する機会を増やし、日本ファンの拡大に努めていきたいと思っています。

エジプトは欧米の影響が強く、広く一般の人々に日本に興味を持ってもらうことは簡単なことではありませんが、街を見ると、人口の約65%を占める若者達(29歳以下)で溢れており、その若者層をターゲットの中心にすえた

交流を実施していきたいと思っています。

近年では、観光産業以外にもマンガ等ポップカルチャーへの関心から日本語学習を始める人も増えているようです。昨年、アレキサンドリアの日本語講座の学習者募集に対し約200名もの希望者があったことから、学生や社会人を中心に絶対数は多くはありませんが、日本に関心を持つ人々が近年増加していると実感します。

また、最近ではカイロの街中でも日本食(SUSHIが中心)をメニューに出すレストランが少しずつ増えはじめ、若者達がトレンドリーな感覚でSUSHIをつまんでいます。こうして、エジプト人の日常の中に、少しずつ日本文化が入り込んでいるようです。そういう流れを大切にしながら、これからもエジプトにおける日本文化のオアシスとなるよう努めていきたいと考えています。